

姫路教会での滞在を終えて

助祭 パトリック 上田憲

この夏に、姫路教会に滞在できたことは大きな実りの時間であり、慰めの時でもありました。特に、姫路教会において、初めての集会祭儀を司式したり、また、聖母の被昇天のお祝いの際には、初めて洗礼を授けるといふ恵みをいただきました。これらのことをふまえ、まずは、神様をたたえるとともに、食費がかさんだにも関わらず、嫌な顔一つせず、また、教会において多くの関りを持たせていただいた春名神父様、イズコ神父様へ感謝をささげたいと思います。ありがとうございました。

今、この原稿を書いているのは、9月14日でまさに、荷物を詰める作業の途中でした。広報の方から原稿を依頼されていることを忘れており、慌てて書いています。(笑)しかし、不思議なことに、この9月14日という日は、同時に十字架称賛の祝日であり、私にとってはもっとも考えさせられる日でもあります。というのも、私たち、ひとりひとりが背負う十字架は、本来であれば、忌み嫌われるものであり、何一つ得することなどありません。実際、わたしたちの生活は、いかに楽をして生きるか、いかに幸せに生きるかを考えています。それは、わたしだけでなく、きっと世界中の誰もが思うことでしょう。私も、姫路教会にいて、多くの方に声をかけていただくとうれしい一方で、姫路から大阪に行かないといけなるときは、「なんでこんなに遠いねん！」と姫路への(小さな)悪口を言ったものです。しかし、このときに考えさせられるのは、いかに私は自分のことを考え、嫌なことを他者へ責任を転嫁しているものだ、ということです。いつの間にやら、わたしたちは、自分の十字架を背負っている気になりながら、自分以外のすべてのものに悪口を言いながら、自分の十字架を背負わせようとしているのです。

イエスの十字架を見るたびに、思い起こさなければならぬことでしょう。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」(ヨハネ3:16)とある通り、自ら進んで他者の十字架を背負い、すべての人に嫌われ、罵倒され、裏切られながらも、わたしたちにその罪を背負わせませんでした。そして、今もなお、キリストは私たちとともに、十字架を背負っていらっしゃいます。これは、わたしたち一人ひとりにも同じことを言われているのではないのでしょうか。「貴方は、わたしにとって、大切な存在である。だからこそ、貴方を別の誰かのために送ってるんや！」自分の十字架の嘆きではなく、友の苦しみを知らうとするものでありたいと、願わずにはられません。

わたしは、姫路教会での滞りを通して、たくさんの方のことを学ばせていただきました。私の召命の道も、間違いなくこの十字架へとかけられていく道でもあります。しかし、わたしとともに、主がいてくださる、そして、多くの方の祈り、支えを通して、私の足を前に運ばせてくださっていることは、大きな慰めでもあります。わたしも進んで、多くの方の

十字架を担えるようになりたいと思います。それは、わたしたちが互いに思いやり、気に掛けることで初めてできることで、何より神の助けを願わなければならないことでしょう。ある人からは悪口を言われるかもしれません。ある人からは、けなされるかもしれません。しかし、それでもなお、「わたしはあなたを愛しています。」と語れるような「キリスト者」になりたいと思います。

姫路教会の皆様、本当にありがとうございました。私の歩みは同時に、みなさんとともに歩むキリストへの道でもあります。これからも共に、歩んで行けるようにお祈りしています。至らない点多々ありましたが、どうか、お許してください。多くの方と話せなかったのが残念でもありますが、楽しみをすべて体験してしまうのも、次に来る楽しみがなくなってしまうことでしょう。また、みなさんに会えることを楽しみにしています。本当にありがとうございました。